

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 25 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520547

研究課題名(和文) 談話とのインターフェイスに基づく統語メカニズムの実証的研究

研究課題名(英文) A Empirical Study of the Syntactic Mechanism Based on the Interface with the Discourse

研究代表者

西岡 宣明(Nishioka, Nobuaki)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・教授

研究者番号：80198431

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、一見例外に思われる統語的振る舞いをする問い返し疑問文、談話連結表現、日本語の熊本方言の主格、右方移動、幼児の言語獲得現象を中心に近年のミニマリストプログラムのフェイズに照らして考察し、談話とのインターフェイス構造としてのフェイズの役割を明らかにした。そこで、話題(topic)、焦点(focus)、特定性(specificity)、メタ疑問、否定に関わる素性がいかに統語構造に反映され、統語派生のメカニズムに関与するかを示した。

研究成果の概要(英文)： This study has explored apparent exceptional syntactic behavior of various phenomena, including echo-questions, D-linked expressions, -no nominative of Kumamoto Japanese, rightward movement and language acquisition of infants, in light of recent proposals of the Minimalist Program in the generative grammar and explicated the role of 'phase' as the interface structure with the discourse. It has verified how features involved in topic, focus, specificity and meta question/negation are reflected in syntactic structures and play a part in the mechanism of syntactic derivations.

研究分野：人文学 英語学・言語学 統語論

キーワード：生成文法 ミニマリストプログラム 談話とのインターフェイス フェイズ topic/focus 談話連結  
右方移動 機能範疇の獲得

### 1. 研究開始当初の背景

生成文法理論に基づく談話概念を反映させた近年の研究は、Rizzi (1997)に始まる CP 構造のカートグラフィック的研究に代表されるように、topic, focus 等の概念を組み込んだ文法構造研究である。それは、Rizzi (2002, 2004, 2006)、Haegeman (2000, 2006, 2012)、Maeda (2010)に代表されるように英語を含むヨーロッパ諸言語の文法現象の解明に寄与してきた。(その日本語への応用としては、Endo (2007)を参照。)

また、CP 構造は生成文法研究において、近年特にフェイズ理論(Chomsky 2000, 2001, 2005, 2007, 2008)の中で理論的側面からもその重要性が増しており、その構造研究は文法理論構築の観点からも意義深い。

本研究代表者は、否定文の節構造を長年の研究課題とし、近年、研究分担者の一人とともに、節と名詞表現の平行性をフェイズ理論に照らして考察してきた。そして、その研究の中で談話的要因による規則の例外の存在に着目するようになった。

具体的には、

- (1) 談話的な「メタ言語否定(metalinguistic negation)」(Horn (1985, 1989))と呼ばれる否定文には通常の否定文にみられる制約が働かない。
- (2) 名詞表現で、「談話連結(D-linking)」(Pesetsky (1987))と呼ばれる談話と結びついた表現はそうでない表現と異なる例外的ふるまいをする。
- (3) さらに対話者の発話を繰り返して尋ねる「繰り返し疑問文 (echo question)」(Culicover (1976))は通常の疑問文とは異なる文法規則に従っているようにみえるといったことである。

これらの現象に対し、「何故」の問いを探求し、そのメカニズムを解明することにより、例外の説明だけではなく、談話とのインターフェイス構造を含む従来とは違う CP 構造が明らかになり、フェイズ理論に対する新たな貢献が期待できると考えた。さらに、その際、CP 以外のフェイズ特に DP との関係、英語以外の言語、特に日本語での振る舞い、ならびに右方移動や幼児の言語獲得を探ることにより、より包括的な文法の姿が明らかになると考え、本研究プロジェクトを提案した。

### 2. 研究の目的

単文レベルで働く文法制約が、ある談話の中で用いられた場合に働かない場合がある。それは従来、例外扱いされてきた現象であるが、談話のなかであれ、文として機能している以上、何らかの統語的メカニズムが働いていないはずはない。

本研究は、この直感を近年の生成文法理論に照らして実証するものである。すなわち、本研究は、以下の2点を目的とする。

- (1) 一見例外的に思われる具体的現象の分析

を通して、統語構造における談話とのインターフェイス構造を探求し、その統語的メカニズムを解明する。

- (2) インターフェイス構造のフェイズとしての役割を検証し、最適の文法理論構築に貢献する。

### 3. 研究の方法

例外的に思われる現象から談話とのインターフェイス構造としての統語構造とメカニズムの解明を目指し、フェイズの役割を検証することを目的とする本研究プロジェクトは、その目的達成のために、最新の理論的動向を十分に見極めることが必要であると同時に、できるだけ多くのデータと照らした実証的研究が必要と考え、以下の分担と手順で研究を行った。

#### 分担

<研究代表者(西岡)>

CP の内部構造とそれに関わる文法現象(メタ言語否定、繰り返し疑問文、topic, focus に関わる日本語の方言)の研究ならびに統括と総合

<研究分担者(増富)>

DP, nP の内部構造とそれに関わる文法現象(談話連結、特定性)の研究

<研究分担者(田中)>

右方移動と focus のフェイズ理論研究

<研究分担者(團迫)>

子供の機能範疇の獲得と日本語の方言研究からの CP 構造の検証

#### 手順

- (1) 基礎資料の収集と作成

研究代表者と分担者がこれまで構築してきた考察を発展させ、CP、TP、vP、DP の各領域を中心にそれぞれの分析対象に関する文献を整備し、また、インフォーマントチェックにより、基礎資料の収集と作成を行った。また、ミニマリスト・プログラムの最新の動向を的確に把握するために、同時に理論的考察に必要な言語学、英語学の文献を整備した。

- (2) 個々の現象の分析と理論化

そして Topic、Focus という概念を軸に通例の統語規則の例外と思われる現象の統語構造を詳しく分析し、当該現象を説明するために派生に基づく理論化を CP、vP、DP、nP に関して行った。

- (3) 総合、理論的意義の考察

そのことにより、CP、DP フェイズ内での機能範疇間の相互作用と内部構造を明らかにし、本研究のもつ理論的意義を考察し、文法理論構築への貢献をめざした。

- (4) 成果の公表

その成果について全員でシンポジウムを行い、学会での評価を受けた他、各自で国内外の学会発表を行い公刊し、公表した。

#### 4. 研究成果

本研究は、一見例外的に思われる様々な現象の統語分析を通して、談話とのインターフェイス構造をもつと考えられる CP と DP の内部構造と役割をミニマリストプログラムのフェイズ理論と機能範疇のカートグラフィック研究に照らして考察し、現象の解明と理論構築への貢献を行った。その研究内容と成果は以下のようにまとめられる。

(1) 通例の否定文や疑問文に見られる「島の制約」や「優位効果」等が発話の繰り返しを伴うメタ言語否定と繰り返し疑問文では消失する。これは単なる例外ではなく、繰り返しの談話構造を反映した以下の(i)のようなメタ疑問、否定投射が CP 上位に存在し、スコープ内の要素を束縛して焦点化を行うメカニズムが働いている。

(i) [Q/NEG<sub>i</sub> [CP [TP...XP<sub>i</sub>...]]]

これは、繰り返し疑問文に関しては日本語で顕在的に「って」により実証されることを明らかにした。(論文、学会発表、にて公表)

(2) CP 領域内には確認や同意といった談話構造を反映した投射があることを、下記のような否定の意味を持たない一語化した終助詞「くない」を含む構造を容認する日本語の九州方言により実証した。これは標準日本語では見られない現象であり、標準日本語の観点からは例外的である事実観察による分析のインターフェイス構造解明への貢献である。(論文、学会発表にて公表)

(ii) [CP [TP...]]...くない]

(3) (2)と同様に一見例外的に見える日本語の方言の事実として九州方言特に熊本方言の主格「の」の用法がある。本研究ではこの方言の主格「の」の統語的位置、意味の詳しい分析により、日本語における主語の位置と移動のメカニズムを解明した。熊本方言では、TP 指定部へ移動した主語は「が」で表わされ、動詞句内にとどまる主語は「の」で表わされるが、前者は topic/focus 解釈となるのに対し、後者はその解釈ができない。それは、Miyagawa (2010)が提案したように談話配置型の日本語は一致言語の英語とは異なり、Chomsky (2007, 2008)と素性継承のメカニズムにおいて C から T に継承される素性が topic/focus であり、topic/focus 解釈をもつ主語は TP の指定部へ移動するがもたない主語は動詞句内にとどまるとする分析が正しいことを実証するものである。(論文、学会発表にて公表)

(4) 優位効果などを受けないという例外的な

振る舞いを示す談話連結表現(which NP)ならびに特定の解釈をもつ(不)定名詞表現の内部構造を詳しく検討した結果、以下のように DP も CP と並行的複数の機能範疇からなっていることを明らかにした。

- (iii) a. CP layer ...  
Force...(Topic)...(Focus)...Fin IP
- b. DP layer  
Reference...(Specificity)...(F...)  
nP

この分析では、定名詞句からの談話連結表現の抜き取りは、DP フェイズの edge に位置する SpecificityP の指定部を経由して移動することになるが、不定名詞表現からの抜き取りは特定性の解釈に応じて nP のフェイズ性が異なるために文法性に違いが生じることを明らかにした。(論文、学会発表)

(5) 重名詞句移動、名詞句からの右方への抜き取り構文は、左方移動の場合と同様にフェイズの edge 素性により派生するが、両者の違いは、左方移動の場合移動する要素が上位の機能範疇と一致素性を有するが、右方移動の場合にはそれが無いことのみにあることを明らかにした。また、いずれの場合にも、フェイズの edge 素性による移動には multiple Spell-Out が適用することを仮定することにより、右方移動構文の様々な特性を引き出せることを明らかにした。また、右方接点繰り返し上げ構文との違いも明らかにした。(論文、研究発表)

(6) 英語の言語獲得期の幼児は大人の文法では見られない空主語文を発話する。これは、幼児が CP まで投射していないからとする従来の分析の問題点を明らかにし、定形性を考慮に入れた代案を提出した。(学会発表) また、存在文における定性制約を幼児が発達のどの段階で獲得するのかを考察し、機能範疇の果たす役割を明らかにした。(学会発表)

上記研究は、例外的に思われる個々の現象の検証を積み上げ、取り扱った現象がいずれも規則の例外ではなく、むしろフェイズに関する機能範疇の役割を明らかにするものであることを実証したものである。このような総合的研究はこれまでになく独自性が高いと言える。また、本研究は、フェイズにおける機能範疇のカートグラフィが重要な役割を果たすことを示唆している。今後、さらにフェイズのカートグラフィ研究を推し進めることにより、フェイズの核が何であるのか、従来強フェイズ、弱フェイズとして区別されてきたことを本質はどこにあるのか等の新たな課題へとつながる研究となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 16 件)

Nishioka, Nobuaki, “On the Positions of Nominative Subject in Japanese: Evidence from Kumamoto Dialect,” *Proceedings of the 10<sup>th</sup> Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL)*, 査読有、to appear.

西岡宣明、「問い返し疑問文の節構造」、『言葉のしんそう(深層・真相)』大庭幸男教授退職記念論文刊行会編所収、英宝社、査読無、2015、pp. 83-94.

田中公介、「前置詞残留と右枝節点線上げに関して—フェイズ理論の枠組みから」、『九州英文学研究』査読有、第 31 号(『英文学研究支部統合号 第 7 巻』所収)、2015 年、pp.43-51.

増富和浩、「[DP [indefinite-DP's][D' [NP]]] 型名詞句の解釈について」、『人文社会科学論叢』宮城学院女子大学人文社会科学研究所(編) 査読無、第 24 号、2015 年、pp.47-59.

團迫雅彦、「同意要求表現「クナイ」の終助詞化と意味的性質について」、『2014 年度日本語文学国際学術研討會国際會議手冊』、査読無、2014 年、pp.49-55.

増富和浩、「英語名詞句の内部構造の精緻化について—限定詞の生起位置に関する理論的可能性に関する考察—」、『人文社会科学論叢』宮城学院女子大学人文社会科学研究所(編) 査読無、第 23 号、2014 年、pp.67-80.

Miyagawa, Shigeru, Hedde Zeijlstra and Nobuaki Nishioka, “Negative Dependencies in Japanese,” *Proceedings of the 8<sup>th</sup> Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL)*, 査読有、2013, pp.231-244.

西岡宣明、「熊本方言からみる日本語の主語の統語位置」、『言語学からの眺望 2013』、福岡言語学会(編)、九州大学出版会、査読有、2013 年、pp.176-188.

増富和浩、「(非)特定性を生じる名詞句の構造についての一考察：談話とのインターフェイスを視野に入れて」、『言語学からの眺望 2013』、福岡言語学会(編)、九州大学出版会、査読有、2013 年、pp.336-348.

田中公介、「英語の wh 疑問文と重名詞句転移構文のフェイズ理論的考察：節境界制限と前置詞残留を中心に」、『言語学からの眺望 2013』、福岡言語学会(編)、九州大学出版会、査読有、2013 年、pp.107-120.

[学会発表](計 12 件)

團迫雅彦、「同意要求表現「クナイ」の終助詞化と意味的性質について」、『2014 年度台湾日本語文学国際学術研討會』、2014 年 12 月 20 日、淡江大学(台北市・台湾)

團迫雅彦、「DP の定性制限とその獲得について」、『第 67 回日本英文学会九州支部大会』、2014 年 10 月 26 日、福岡女子大学(福岡県・福岡市)

Nishioka, Nobuaki, “On the Scope of Negation in Japanese: Evidence from Kumamoto Dialect,” *GLOW in Asia X*, May 24, 2014, National Tsing Hua University (国立清華大学)(新竹市・台湾)

Nishioka, Nobuaki, “On the Positions of Nominative Subject in Japanese: Evidence from Kumamoto Dialect,” *Workshop on Altaic Formal Linguistics 10*, May 2<sup>nd</sup>, 2014, MIT (Cambridge, MA, USA)

Nishioka, Nobuaki, “On Echo Questions and Split CP,” *Annual Spring Conference of ELSOK (English Linguistics Society of Korea)*, April 26, 2014, Hankuk University of Foreign Studies, (Seoul, South Korea)

西岡宣明、「発話の繰り返しと文法現象」、『談話と統語構造とのインターフェイスを求めて—例外的文法現象とフェイズ理論—』、日本英文学会九州支部第 66 回大会シンポジウム、2013 年 10 月 26 日、鹿児島国際大学(鹿児島県・鹿児島市)

増富和浩、「談話(D)連結 wh 句の統語特性とその内部構造の関係について」、『談話と統語構造とのインターフェイスを求めて—例外的文法現象とフェイズ理論—』、日本英文学会九州支部第 66 回大会シンポジウム、2013 年 10 月 26 日、鹿児島国際大学(鹿児島県・鹿児島市)

田中公介、「英語の焦点化移動構文のフェイズ理論分析—右方移動現象を中心に」、『談話と統語構造とのインターフェイスを求めて—例外的文法現象とフェイズ理論—』、日本英文学会九州支部第 66 回大会シンポジウム、2013 年 10 月 26 日、鹿児島国際大学(鹿児島県・鹿児島市)

團迫雅彦、「言語獲得過程における空主語現象と統語構造」、『談話と統語構造とのインターフェイスを求めて—例外的文法現象とフェイズ理論—』、日本英文学会九州支部第 66 回大会シンポジウム、2013 年 10 月 26 日、鹿児島国際大学(鹿児島県・鹿児島市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西岡 宣明 (NISHIOKA, Nobuaki)  
九州大学・大学院人文科学研究院・教授  
研究者番号：80198431

### (2) 研究分担者

増富 和浩 (MASUTOMI, Kazuhiro)  
宮城学院女子大学・学芸学部・准教授  
研究者番号：90452795

田中 公介 (TANAKA, Hiroyoshi)  
産業医科大学・医学部・講師  
研究者番号：40565751

團迫 雅彦 (DANSAKO, Masahiko)  
九州大学・大学院人文科学研究院・  
専門研究院  
研究者番号：50581534